



USIS 提供

「父親代理」が 子どもたちを助けます

ニューヨークのベルビュー病院の小児病室では、二十五人の「父親代理」が、療養中の子どものために働いています。

ある富裕な実業家は、一週に二晩、夕食をすますと病院にゆき、上着とひるまの仕事をぬぎすて、ベッドの間を玩具の汽車を走らせてまわります。彼のここでの仕事は玩具を与えることだけではなくて、自分自身をも与えることなのです。いちどきに十数人の子どもと個人的に親しくすることはできませんか

ら、彼は他の子たちには玩具を与えておいて、特に院長から指定されて、個人的な面倒をみる必要がある子どもに自分自身を与えるのです。

この企画が始まってからすでに七年になりますが、この「父親代理」の制度は、すばらしい実績をあげています。これは病院が金で買うことができない薬、すなわち愛情を与えているからです。

一九四九年にこの企画が始められたとき、それは、長期にわたって病院にいる子どもたちが、無感動な、

不活潑な、無気力な状態におちいってゆく心理的な病氣——ホスピタリズムから救うことを目的としていました。婦人の篤志家たちが、ひるま、誕生日の会をしてやったり、しょに遊んでやったりして、夜は父親たちがやってくるのです。この病院の小児教育主任のアルサンドリニ女史の言うところによると、「病院では男性の助力を必要としています。それは強い腕力を必要としているというのではなくて、子どもたちは日常の経験の中

で父親の姿に接することを必要としているのだということです。

このような篤志家の父親は、一九四九年には五、六人だったのが、今は二十五人にもなっており、もっと多くの父親が要求されています。この「父親たち」は、約束した日の晩、六時から九時まで働きます。そしてすぐにそれとわかるように、制服をつけます。

多くの篤志家による運動とは違って、この仕事は定期的な父親たちに来てもらうのに、何の苦勞も要しません。「それは、その仕事が必要ながあまりにも明瞭で、子どもたちは目にみえて活潑に反応するようにになるので、『父親』たちにその必要性を説得する必要がないからなのです」とアルサンドリニ女史は云います。「それは男性の健康にもよいことです。子どもたちが待っていて、喜びの叫びをあげて迎えてくれるのは、まったくやり甲斐のあることですから」

ある場合には、ホスピタリズムは家庭でも起ることがあります。そして病院に入ることによって癒されます。ある四才の子どもは、一年間笑いもせず、話すこともしなかったの

で、嘔ではないかと思われていました。ところがこの病院に来て二月目に、『父親代理』にむかって笑いかけ、三月目に話しかけるようになったのです。こんな経験をする、大がいの男性は、毎晩毎晩訪ねて来なくなってしまう。

この企画は、有名な精神医学者、ゴールトファルフ博士と、スピッツ博士が、子どもたち、とくに孔児が長期にわたって病院に入っていると一種の寂寥による精神身体病状をおこし、永久に発達をおくらせたり、時にはそのため死ぬこともあるという研究報告を発表して以来、とりいられるようになったも

のです。「父親代理」それは、家庭の記録をみることは許されませんが、特に子どもが安心感と信頼感を欲しているときには、それを容易に感じとりませう。

この病院で働らくことがきまると、「父親代理」は、精神科医と心理学者によって注意深く用意された準備訓練をうけます。ですから、小児病室で経験せねばならない情緒的な問題にぶつかっても驚くことはありません。

現在名簿にのっている「父親代理」の中には、広告業者、新聞業者、衣服製造業者、富裕な実業家、大運石工、教師、自動車運転手、セールスマン、学生など、各職業をふく

んでいます。「この『父親代理』になるのは、特別な資格はいりません」とアルサンドリニ女史は云っています。「ただ必要なのは、子どもたちに対する真摯な興味と、子どもたちがその一員である社会が、基本的に友情にみちた人間の社会であることを感じさせるのと助けたいという望みとです。『父親代理』となることに対する報酬は、金で買うことはできません。ある父親たちは、ひるまの職業生活を生計をうる手段とし、病院で子どもたちとともに生活することを、人生の真の目的を果しているときだと考えるようになっている」と云っています。

